

冬の水田に水をはろう!?

—第4回東アジアガンカモ類重要生息地ネットワーク
支援鳥学グループ(JOGA) 参加報告—

神谷 要

米子水鳥公園, 683-0855 米子市彦名新田665

2002年9月14日、日本大学で行われた日本鳥学会の自由集会で「水田農業とガンカモ類～「対立から共生へ」その鳥類学的戦略～」と題した自由集会が行われた(企画世話人 呉地正行、吉田志保子、須川恒、宮林泰彦)。

日本では古来より稲作農業によって水田がつくられ、ここが湿地性環境の代償的環境としてハクチョウを含めたガンカモ類の生息地となってきた。しかし、農薬や近年の圃場整備による農場の暗キョウ排水設備の発達や普及によって、冬季の水田に水が溜らなくする乾田化が進んだ。このような水田では、生物多様性が失われ、ガンカモ類をはじめとする生物の生息数が少なくなっている。さらに、収穫後に水田を耕起してしまうために落穂もなくなり、さらにガンカモ類の生息に不適な環境となっている。

今回、その対策としてアメリカ・イタリア・韓国・日本などで行われている冬期湛水(たんすい)水田の取り組みが紹介された。湛水とは、稲作の終わった冬季の水田に水をはっておくことである。方法はとても簡単で、暗キョウのドレインコック閉めておけば、雨水だけで湛水できる。

このような取り組みは、実際にとても大きな効果があるようで、石川県では水田に水をはったら、今までほとんど見かけることのなかったコハクチョウが数百羽やってきましたり、カルフォルニアでは数千羽のハクガンの飛来地となったりしている。

農業サイドでは、このような行為によってあぜの崩壊や土壌硬度が下がって機械農業に影響が出るのではという心配もある。しかし、このような問題に対して、湛水期をガンカモの飛来期11-2月に湛水を限定する。また、水位をきわめて浅く維持することなどの対応によって、その影響を軽微なものとする。また、それだけでなく、湛水によって多くのメリットもある。

今回の集会で上げられたものは、

1. 抑草効果(陸生の植物が生育できなくなり、水鳥が雑草を食べてくれる)
.....減農薬にもなる。